

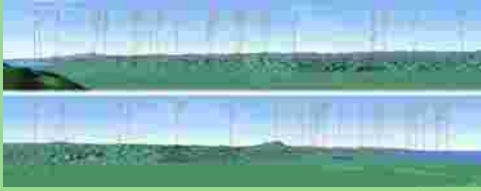
第17回 伊能忠敬 第八次測量隊の足跡をたどる

遙堪村→遙堪峠→鰐淵寺→伊努谷峠→西林木村ルート

伊能忠敬測量隊は文化10(1813)年に第2回目の松江藩領の測量を行っています。旧暦11月29日に宿泊地・杵築(きづき:大社町)を出立した測量隊は遙堪(ようかん)村から山道を登り、遙堪峠から望める30座の山々を計測しています。鰐淵寺(がくえんじ)に着くと当時12を数えた諸坊を巡り松本坊で一泊。翌日は伊努谷(いぬたに)峠で13座の山々を測ってから林木(はやしぎ)村の伊努(いぬ)神社へ降り、武志(たけし)村で昼食後、出雲平野部の測量を続けます。測量や航海に使われるコンパスの磁石の針は北を指すと一般に思われますが、本当の北(真北:しんぼく)ではなく、地球の磁力に従って少し振れた北(磁北:じぼく)を指すのです。この磁北は時代と場所によって変化しますので、測量学や地理学の観点から歴史を知るうえで役立つ可能性があります。面谷と乾はその追跡調査のために、200年前に行われた伊能忠敬測量隊の計測地点に立って追試する作業をしています。そのさい参考にする文献のひとつが『伊能忠敬測量日記』です。日本全土を歩いて測った毎日の行動が詳細に記録しており、国宝に指定された日記です。活字化もされていますが、2011年に「伊能忠敬と伊能図の大事典をつくる会」から原本を撮影してDVDとして出版されました。

もうひとつは『山嶋方位記(さんとうほういき)』という測量記録データです。観測地点から見える山や島の名称と方位が全国で約20万件も記録しており、その測量をもう一度やりなおしてみると観測者の立ち位置がピンポイントでわかるのです。

山の名称が現代とは微妙に異なっているので山座同定(さんざどうてい:山の名前と場所を合わせる)にナゾ解きの楽しみもあって面白く、これも国宝ですが、伊能忠敬記念館へ申請すれば必要な個所がコピーで取得できます。



伊能隊が眺めたのと同じ光景をカシミール3D(三次元的立体地形図)で再現した画像です。もっと拡大すると迫力のある画面になって山の名前も全部わかるのですが、画像の制約上ごかんべんください。

宍道湖・茶臼(ちやうす)山からはじまって大山(だいせん)火山群から八雲の天狗(てんぐ)山、奥出雲の船通(せんつう)山や日野郡の花見山と道後(どうご)山、中国山地の吾妻(あづま)山・猿政(さるまさ)山・大万木(おおよろぎ)山・琴引(ことびき)山が並び、石州の三瓶(さんべ)火山群・阿佐(あさ)山・大江高山(おおえたかやま)火山群、江津の島ノ星(しまのほし)山まで見渡せます。

現代の遙堪峠は樹木が茂っており、伊能隊が見た光景より見える範囲は限定されますが、気象条件が良ければ木の間がくれに多くの山々を遠望できます。

写真は遙堪峠の地蔵で、『日記』には「これより鰐淵寺まで一町ごとに地蔵有(あり)」と書かれたのと同じものです。

遙堪峠



遙堪峠から北西にゆるやかな谷筋を下ると鰐淵寺です。中世には杵築大社を支配する時期もあるなど山岳仏教の一大拠点でした。江戸時代でも領内でトップクラスの寺格を誇り、お城での着座順でも上位で、三谷権大夫家老家所蔵の『松江城下町絵図』には城西地区に「鰐淵寺里坊」が記載されるほどの勢力がありました。

ところが明治維新期の廃仏毀釈によって宗教的権威や経済的特権が奪われて衰微し、今日では本堂と松本坊などを除くと、あらかたの堂宇は朽ち果てて茫々たる藪の中です。『伊能忠敬測量日記』には和多坊・本覚坊・岩王院など12の坊や地蔵堂や鳥居の位置などが記録され、繁栄した時代の鰐淵寺を偲ぶことができます。

「11月晦日晴天六ツ時に鰐淵寺松本坊立」した測量隊は仁王門(におうもん)から伊努谷峠へ向かい、そこから日野郡の大倉(おおくら)山、斐川の大黒(だいこく)山・仏経(ぶつきょう)山、奥出雲の玉峰(たまみね)山・鯛ノ巢(たいのす)山などを観測しています。『山嶋方位記』にある「楯縫(たてぬい)郡鰐淵寺領と出雲(しゅつとう)郡西林木(にしはやしぎ)村境」から再計測してみると、伊能隊の観測地点は伊努谷峠から少し尾根筋を旅伏(たぶし)山へ寄った地点だとわかりました。

伊努谷は山の案内書などに「イドダニ」と誤ってルビをうたれたことから、乾を含む多くの人が「いどだに」と思っていました。『出雲国風土記』はこの地域を「イヌの郷(さと)」と呼んでおり、谷の出口に鎮座する神社は「式内伊努神魂神社」と「式内伊努神社」の二柱があって、伊努の字に「いぬ」と振り仮名があるので。伊能測量隊はこの場所へ下山して参詣し、祭神や祭日を『日記』に記録しています。

今回は鰐淵寺周辺の紹介に留めましたが、伊能測量隊は出雲大社の右手上方にピラミッドのようにそびえる弥山(みせん)へも登っており、そこからは隠岐・出雲・伯耆・石見はもとより益田の高島や長州の須佐高(すさたか)山まで、360度の山と島を観測した驚くべき記録も残っています。歴史の道を昔の人の目線で歩いてみるのも面白いですよ。

【調査協力】辻本元博・今岡紀雄・西村英雄

(平成24年2月1日 絵図地図部会 面谷明俊・乾 隆明)